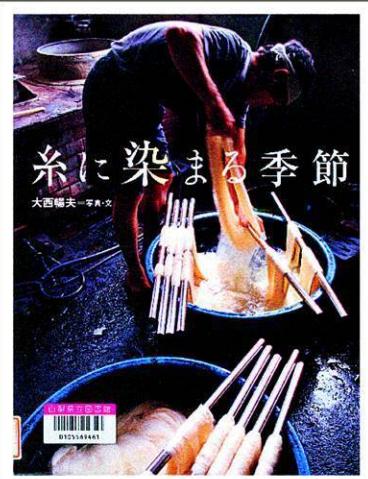


小学1・2年生向け

糸に染まる季節

大西暢夫写真・文

岩田さんは、新潟県で植物を使って糸を染め、その糸で布を織る仕事をしています。まず家の近くの山や川沿いでヨモギやクルミなどの葉を集め、次に葉を煮出して糸を染める液を作ります。蚕のまゆからとった糸を、染める液に入れ、糸の束を何度も上下に入れ替えながら全体を染めます。すると、元の葉の色とは違う、柔らかいピンクや黄色、茶色などさまざまな色に染め上がります。冬になると春から秋に染めた糸を使い布を織ります。岩田さんは「色には季節がある」と言います。春の色は春、夏の色は夏にしか染められない「季節の色」なのです。季節に合わせた生活の中で、植物の中に隠れた「季節の色」を糸に染める染色家の仕事を写真で紹介した本です。



(岩崎書店 1650円)

小学3・4年生向け

みんなのおりぞめ

山本俊樹編著

和紙を三角形などに小さく折りたたんで輪ゴムで止め、染料液にひたして、模様を染めることを「おりぞめ」といいます。輪ゴムを外して、破れないように紙の折り目をそっと広げてみると、きれいな模様があらわれます。おりぞめに失敗作はありません。紙の折り方、たたみ方、色付けする位置などを変えて、丸や四角、ハート形、ジグザグ模様など、決まった形の模様を染めることもできます。本の後半には、染めた紙を使ってうちわやランタン、ノート、封筒などを作る方法が紹介されています。おりぞめは大人でも子どもでも楽しめます。いろいろな折り方や色で染めて、世界に一つだけのおりぞめを作ってみませんか。



(かせつしゃ 1650円)

図書館へようこそ

小学5・6年生向け

よみがえった奇跡の紅型

中川なをみ著

沖縄県には、琉球王国の王族や士族用の着物に用いられてきた「紅型」という伝統工芸があります。「紅型」は、黄色や水色の生地に龍や桜などの模様が描かれた、鮮やかで美しい染め物です。琉球王国滅亡後に紅型は衰退し、第2次世界大戦では型紙など染色に必要な道具は全て失われましたが、紅型に心引かれた人たちが紅型を復活させようとします。その中でも特に大きな功績を残したのは、戦前から紅型を研究し、型紙を集め技法を学んでいた鎌倉芳太郎と、戦火で失われた道具や染料を手作りして紅型を復興させた職人の城間栄喜、紅型を発展させ、型紙を生み出した染色家の芹沢鉢介の3人です。沖縄の歴史と共に、紅型復活の道のりを描きます。



(あすなろ書房 1650円)

染め物 色や工程に注目



私たちが着る服は、糸を染めたり、布に模様を描いたりして、さまざまな色やデザインの物が作られています。そこで今回は染め物をテーマに、植物を使い糸を染める方法や沖縄の紅型のことがわかる本、着物の色に注目した物語などを紹介します。

(山梨県立図書館 山田あや) =毎月第2週に掲載します

中学生向け

千に染める古の色

久保田香里著 紫昏たう絵

平安時代の京の都、右大臣の姫君で13歳になる千古は、女性が成人になる儀式「裳着」を今年のうちに行うため、外出しないように言われて退屈していました。ある日千古は、召使いの小鈴と新しい衣用に染めあがった布を重ね、さまざまな色の組み合わせの美しさを楽しんでいました。そこへ偶然来た家来の娘、上総と話すうち、「源氏物語」で主人公の光源氏たちと恋をする女性たちの衣装を、実際に着てみようと思いつきます。千古は今まで考えたこともなかった布の染め方にも興味があり、ひそかに邸内の染め物工房へ行きます。染め物について知れば知るほど、千古の好奇心は止まりません。自らさまざまなことを考え行動し始めた女の子の成長の物語です。



(アリス館 1540円)